The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	教育に対話が乱入するなら
Author(s)	山本, 聖人
Citation	臨床哲学のメチエ. 2011, 17, p. 28-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10874
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

教育に対話が乱入するなら

山本 聖人

今年の四月、大学に入ってから哲学とはほぼ無縁な生活を続けていた私は、川田さんから洛星高校プロジェクトのお話をいただいた。授業では対話という活動が大きなファクターとなり、しかも私たちは対話をしに行くのではなく「教えに行く」。私には全てが新しく、意味不明な中で始まった授業である。哲学を教えるということ以前に、未だに哲学とは何なのかさえもあまりわかっていないのだが、教育に興味があり、教師になることを人生の第二目標 (第一は未定) に掲げている私にとって、この機会は現行の、あるいは自分の受けてきた教育そのものを見つめなおす一つの契機となった。

なぜ高校の授業で対話なのか。対話は、教育のために生み出されたものではない。というか、教えることを目的として生まれたものは何一つとしてない。話を高校までの場合に限定するなら、数学は、そもそもは数を数えるために生まれたものだろう。英語は喋るためにあるものだし、歴史 ... 例えば本能寺の変だって、後世でテストに出るために起こったわけではない。

教える内容とは、世界にある様々な出来事から一部を抜き出してきた、いわば教材である。それぞれの教材に応じて、生徒が身につける能力は異なり、習得できる能力が、生徒がその時代に生きていく上で有効である場合に限って、その教材が用いられる。大航海時代に航海術の教授が盛んになったり、現代にプログラミングの授業があったりするのはその顕著な例であろうし、私個人としては、これから必要になるならば電化製品の取り扱いについての授業が高校であっても一向に構わないと思う。世界の全てが教材となりうる。本来はそれらの知識に優劣などはない。にもかかわらず、歴代アイドルの名前を完璧に言える人よりも英語を完璧に話せる人が称えられるのは、英語がこの時代において有効な知識であるからである。それゆえに教師にとっては、広い意味での教材を選ぶ能力が非常に重要になってくる。自覚があるのかはわからないが、カリキュラムを決定する文部科学省の方々も同様である。では教材として対話を用いた場合、どのようなことが起こるのか。

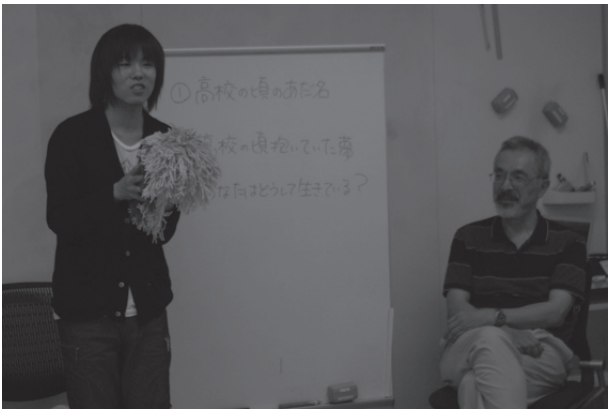
この問いに移る前に、現行の高校までの授業カリキュラムにおける知識の教授パターンについて考えてみたい。私見だが、一般的には、二つのパター

ンがあると思われる。一つは事象そのものについての教授、もう一つが与えられた問題を解決するためのプロセスを考え、学ぶことを通しての教授である。現代文を例にとって挙げるなら、評論の内容や漢字、語彙を理解することは事象の教授、記述問題に対応する答えを本文から探し出し、自分で文章を作って解答することは解決プロセスの教授である。この二つのパターンをしっかりとマスターすれば、とりあえず現代では生きていくことが出来るというわけだ。幅広い事象について理解を深め、そうして得た知識・経験を元に解決する力を養成する。なんとも清々しい理想論だが、これが徹底されれば確かに生きていく上で不自由はなさそうだ。

翻って、対話。対話はどちらのパターンに当てはまるだろう。「これがコミュニティボールですよ」と説明することは事象の教授としてはあまりに浅い。授業では様々な対話法を試しているが、生徒のうち一人でも、「相互質問法はこういうふうにして、こういうことを目的にして云々」と答えられる生徒がいるだろうか。あえてワークの目的をはっきりと伝えていないこともあり、授業中に起こる全ての事象について教えているとはとてもじゃないが言い辛い。ではプロセス教授の方はどうか。何らかの問いについて、他人と一緒に答えを考える。確かにプロセスについて考えてはいる。対話にクリティカル・シンキングが関わってくるとすればここだろうか。しかし、対話における問いは、「なぜ生きているの？」「このジュースは新しい？」「何でも知ってる方が良い？」といった、人によって答えが違う、正しい答えが存在しないものも多くある。これではどれだけ考えたところで、問題解決のプロセスを歩んでいるとは言えないだろう。

ここに私たちは、もう一つの教授パターンがある可能性に気付かされる。それこそが対話が独自の教材として機能する場面ではないか。無理やり言葉にするなら、気づくことと耐えることの教授。「他者と共に」「あえて答えのない問いに向き合い」「耐える」。問いに向き合った瞬間に、それは哲学に変わる「気づき」となる。そして、これが授業として存在する以上、私はやはり対話をすることが現代に何らかの意味があると信じたい。対話とは、異なった価値観のすり合わせである、と平田オリザ氏は述べている。価値観に正しいも間違いもない。決して重なることなく、正解にも近づかない。このどうしようもない対立に一人一人があえて向き合い、耐えるということが、今混迷を極める世界に必要とされている。

そのために対話がある。そんな風に考えるのは、私の独りよがりだろうか。

洛星で、コミュニティボールを用いて対話を行った回の感想ペーパーにこんな言葉があった。「哲学って、結局何なんだろう ...?」向き合うことのなかった問いに一人耐えているのであろうその問いかけは、ひどく美しかった。

（やまもと　きよひと）